

② 温室空室、花卉の露地栽培を主とする豪浜中心の暖地性高等園芸農業。

③ 自給飼料飼育を中心とする録村の酪農業。

④ 内湾側の海苔養殖業と労働の補充的關係によって結びついた農業。

⑤ 西山地区の戦後の開拓農業

但しこれらは完全に別々の形態をとって分布するのではなく、これらの組合わさった地域が多い。調査地域の土地利用の変貌は大正末期以来著しく、特に戦後に於ける近代農業への発展はめざましい。最近では、暖地性高等園芸農業がこの地域の農業の中心となり、恵まれた気候条件、関東、関西の二大市場の中間的位置及び名古屋市場をひかえている強味、トラック輸送の発達一般の園芸作物に対する需要の増大等が合わさって、この地域の *originality* をもつとも生かす土地利用として暖地性高等園芸農業が調査地域の主体となりつつある。

#### 4. おわりに

調査地域の地域的性格を出そうとして色々の方面から関心を持って調査したが、それは多くの事を知ることが出来、勉強にはなつたがあまり多岐にわたつて中心がなくなつたことが反省される。将来再びこの地域に何らかの焦点をしぼつて、可能ならば台地面の地形形成について研究したいと思う。

## 下総台地の地形と土地利用

### — 旧佐倉町及び根郷村の場合 —

太田 美世子

調査地域は自然的位置からみると、房総半島の北部から中央部にかけてひろがる茨積台地、下総台地のほぼ中央、印旛沼の南にあり、行政的には千葉県佐倉市の旧佐倉町及び旧根郷村で、面積約  $36.5 \text{ km}^2$ 、人口約 1800 人の地域である。こゝは印旛沼を控えた要害の地として中世以来城下町であり同時に成田街道筋の宿場町であつたが、明治以後は連隊所在の軍都となり、終戦後は地方都市となつた市域と、それをとりまく農村地域を含んでおり、平均して就業人口の 42% が農業従事者である。

地形以外にこの地域の自然として重要なものは地下水である。台地を構成する茨積層、所謂成田層は一般に地下水を豊富に涵養しているが、調査地域では標高  $-80 \sim -50 \text{ m}$  及び  $-20 \sim -10 \text{ m}$  附近に二層の被圧地下水層が、 $+10 \text{ m}$  及び  $+20 \text{ m}$  附近に自由地下水層が見られる。この最も浅いものは場所により標高の差がかなりある留水である。これらの地下水は灌漑水、飲料水としてこの地域の水の重要な供給源となつており、25—60 戸の塊村

をなす集落の立地要因ともなっている。

〈地形〉地形分類は、地形図、空中写真の判読、露頭観察、ボーリング等  
の方法により、地形面の形成時期、形態、構成物質等を考慮して次の8つに  
分類した。即ち、1.台地面 2.段丘面 3.谷底面Ⅰ 4.谷底面Ⅱ 5.  
台地斜面 6.谷頭コルヴィウム 7.崖錐 8.湿地である。台地面は標  
高が北部で27—8m、南部で35m程のゆるやかな起伏を持つ面でかなり  
開折が進んでいる。古東京湾時代の浅海性堆積物である砂、粘土等の互層通  
称成田層から成るが、その層序は場所によりまちまちである。しかし最上部  
には必ず偽層を呈する荒い砂層があり、その上に下末吉ロームの水中堆積物  
である灰白色の粘土質の層があり、化石土壌帯を介して、その上に東京パミ  
スを狭む武蔵野及び立川ローム層が堆積している。成田層とローム層は不整  
合でありローム層の厚さは凹部に厚く凸部に薄い。段丘は不連続、非対称で  
調査地域ではスロック状の小さな面が台地面とは微傾斜をなして二段認めら  
れる。いずれもロームを載せている。谷底面は台地が樹枝状に開折された後  
落ちて形成されたもので、Ⅰは表層は茶褐色のSil L、その下にPeat, muck  
を含み、沼の附近ではクライ化された砂の多い未成熟土壌となっている。Ⅱ  
は空中写真で黒く見え、peat, muckが浅い所から発達している。谷頭コ  
ルヴィウムは主として谷頭に発達した、台地が緩かに谷底に落ち込んだ礫植  
の厚い部分である。

〈土地利用〉調査地域の地形と土地利用の関係を1/25000の地形分類図及  
び土地利用図によつて4m<sup>2</sup>平方のメッシュをかけて考察した結果、谷底面  
は殆んどが水田に、台地面は畑、山林、集落に、台地斜面は山林、集落、畑  
に利用されている事などが数量的に明らかになった。次に各利用形態につい  
て述べると、まず水田は、湿田が多く、最近遠天水田が多く、従つて一毛作  
田である。又水害旱害の気象的災害を受けやすく、樹枝状谷の末端部（谷津  
田）には日射不足の田、冷水田も多く収量が少いことが特徴である。しかし  
最近は揚排水機の設置、用排水路の整備、区画整理、交換分合等の土地改良  
事業がようやく進み、湿田の乾田化、機械導入による労力の節約などの結  
果を生んでいる。又、施肥改良事業、品種改良等により反収も増加している。  
畑の利用は水田同様かなり粗放的で冬作は殆んど小麦、夏作は落花生と甘藷  
が主要作物で、蔬菜、果樹は最近ようやく少しずつ作られ始めて来た程度で  
ある。山林は台地斜面及び台地面に分布し平地林の景観を呈しているが、ま  
つ等の人工林が殆んどでいずれも私有林であり、用枝の外に薪炭、堆厩肥、  
苗床屋根ふきなどに、下枝や落葉や下草などが多角的に利用されている。

〈農業〉以上の様な土地利用の人文的背景としての農業の概観を述べると、まず農家の経営規模は佐倉 9.2 反、根郷 1.05 町であり、専業兼業の割合は佐倉専業 55%、兼業 45%、根郷専業 46%、兼業 54%でこの二地区にいくらかの地域差が認められる。どの農家も水田と畑を所有しているが、収入から見ると水稲に多く依存している農家が多い。経営はあまり多角的とは云え、一般に家畜の飼養率は低い。しかし最近二、三の部落で乳牛の飼育が盛んになり始めた事、養豚が急速に普及しつゝある事などが挙げられる。千葉県各地に見られる東京への農家婦人の日帰り行商はこの地域にも見られ農家の現金収入源となっており、蔬菜栽培も自給以外に行商用としてだけは小規模多角的に行われているがこれは単一栽培共同出荷などを妨げるものとなっている。

最近、田地造成、工場誘致、ゴルフ場設置等都市化の動きがこの地域にも見え始め、農業経営の合理化の要請と共に、城下町の昔からのこの地域の停滞的な歩みが、内外からゆすぶられ、急速に変えられつゝあるのが現在の姿であるといえるであろう。

## 近効酪農の地理的考察

### — 千葉県八千代町の場合 —

大野敬子

東京から 40 キロに位置する八千代町について報告する方法として「酪農業が他の地域現象といかに結び付いているか」を考察の中心点に選び地域性の把握を試みた。

千葉県八千代町は旧 3 町村が合併してできたもので、今日でも 3 地区はやや性格を異とする。特に南部の大和田は京成電鉄大和田駅があり、他 2 区に比し純農村的性格が少なくなっている。田地造成が急激に進んだ八千代台も八千代町の一部で、当地域が東京の近郊として大東京の影響を受けていることをはつきり示している。

当地域は下総台地の北西部にあり、地形はほぼ平坦で広く拡がる洪積台地とその間を刻む沖積低地とから成る。基盤は成田層であるが、台地上は関東ローム層が深い畑作物の基本条件になっている。調査の結果ローム層の違いによって台地は高、中、低の 3 面に分類できた。その鍵となつたのはチヨコレート色層・浮石層・水成ローム層である。沖積低地も比較的古いものと新しいものに分けた。その他、谷頭麓斜面、崖下麓斜面、斜面及び湖面干拓面の地形面を設けて地形分類した。